和泉市から参りました。私たちが住む和泉市は、ここ５年の間に、トリヴェール和泉計画、コスモポリス計画――現在はテクノステージ和泉となっていますが、それらの計画で、居住地域付近の自然が開発という名のもとにどんどん失われていっています。そうした開発に伴う自然破壊に危機感を持った市民が集まり、平成７年にネイチャーネットワーク和泉を発足いたしました。和泉の自然をもっとよく知り、市民の共有財産として守り育て、子孫に伝えていきたいという趣旨のもとに、自然観察会やシンポジウムなどを開催してきました。和泉市南部に予定されている槇尾川ダム事業については、治水上の効果が乏しく、反対に失うものの多い税金むだ使い事業として中止を求めます。

ダム建設が出された場合に、失われるもの、損なわれるものについて、ネイチャーネットワークの立場から２点のことを言わせていただきたいと思います。

損失その１――歴史的、文化的景観の破壊による損失。

槇尾川ダム予定地は、金剛生駒紀泉国定公園に隣接する近郊緑地保全区域内で、西国三十三カ所四番札所として親しまれてきた槇尾山の施福寺へと続く、歴史と文化、自然豊かな山道にあります。この槇尾山が、都市近郊にありながら豊かな自然を保てたのは、信仰との結び付きによってであり、多種多様な生物が静かに温存できたゆえんもそこに大きくあると思います。

また、西国三十三カ所といいますと、京都の清水寺、石山寺、兵庫の中山寺、和歌山の粉河寺、奈良の長谷寺など有名な寺々が名を連ねています。その１つとしての施福寺も、豊かな自然環境の舞台の中で、文化遺産として輝きをもつ存在であり続けてもらいたいと切に願います。和泉市唯一の偉大な名所として、もっともっと大切に取り扱われるべき文化遺産だと思います。私たちは、槇尾山周辺の自然が和泉市民だけでなく、広く府民にとって、また全国から施福寺に巡礼に来られる多くの方々に心の安らぎをもらたす大切な役割を果していると思います。

施福寺に参拝されるほとんどの方が、この川の流れを見て、どうしてこの小さなせせらぎにダムが必要なのかと疑問を抱いています。このダム事業が進められると、信仰的つながりをもつ山道がダム湖に沈められ、1500年の歴史を誇る由緒ある施福寺を山上にもつ槇尾山の歴史的、文化的価値が損なわれることとなり、歴史と自然あふれる和泉の国という名にふさわしくないと思います。

損失その２――自然環境の破壊による損失。

この区域では、渓流環境に依存するカジカガエルや、府下で極めて貴重なブチサンショウウオが生息するほか、近畿レッドデータブックに記載されているサツマイナモリやアケボノシュスランなどの稀少植物が自生しています。先ほどただ普通の生物しか住んでいないと言われましたけれども、大変貴重な生物がたくさん存在しております。

大阪府が今年３月に発行した「槇尾川ダム地域の自然」という冊子では、槇尾山は特殊鳥類であるオオカタの生息地として可能性が低いと考えられ、実際の調査では確認されなかったようです。しかし、97年に付け替え道路用地の近くにオオタカの営巣が野鳥の会のメンバーによって確認されており、また１羽の巣立ちが確認されています。

また、ダム予定地に全体の90％の個体が発見されたカジカガエルについては、ダム建設によりその生息が危ぶまれるにもかかわらず、大阪府ダム砂防課の資料によると、生息区域のすべてが水没するわけではないので、種が消滅する可能性は少ないと楽観視し、結論づけている点は適正な判断とは言いがたいと思います。

また、府下では発見例の少ないタカチホヘビも予定地で発見されています。植物では、府の調査では確認されていない木上に着生するカヤランやクモランがダム予定地で確認されています。これらはダム予定地が分布の中心であり、保護が図られるべきものであると考えます。また、乱獲により府下で絶滅が心配されているウチョウランも槇尾山にはまだ自生しています。これらの写真は後でＯＨＰで説明させさていただきます。

珍しいものばかりでなく、生物の多様性保護の観点により、よりよい自然を次の世代に

引き継ぐことが我々大人の責務であると考えています。また、人間を含む生物にとって大変重要な水質の問題も見逃せません。毎年他の団体と大津川河口から上流の槇尾川、父鬼川へとポイントを決めて、水質調査を行っています。私たちが健康チェックのために血液検査をするように、自分たちの住む地域の健全さをチェックするため、川の水質調査をしているわけですが、今年の大津川水系の水質は、中・下流以外は良い数値が出ていました。しかし、ダム建設がなされれば、ダムは水を汚すという定説がありますように、確実に水質は悪化し、その水が放流されれば、川の水質もおのずと汚染されていきます。水質保全の立場からもぜひダムは見直されるべきであります。

以上、失われるものの代表２点を述べてきましたが、自然も、文化も失われて初めてその価値がわかったということのないように、十分な検討が必要だと思います。

環境破壊をもらたし、ダム湖の堆砂により 100年対応できるかどうかはわからないダムに頼るよりも、 100年も1000年も続く保水力のある森林の育成、緑のダムやため池、河川改修、水田などを生かした流域全体の治水手段を代替に考えていくべきだと思います。

ダム計画に反対し、流域の自然を守ろうという私たちの活動に、世界最大の自然保護団体であるＷＷＦ（世界自然保護基金）の日本委員会が、その意義を認め、98年、99年の両年にわたり、私たちの会に対し活動助成を行ってくれています。このことは、槇尾川流域の自然が多くの人々に注目されている証だと思います。失うものの多過ぎるダム計画は直ちに中止していただくことを強く要望するものであります。

最後になりましたけれども、現地の珍しい生植物をＯＨＰ（図）で説明させていただきたいと思います。こちらが近畿レッドデータブックに載っていますサツマイナモリです。稀少植物です。それから、こちらの方が絶滅が心配されていますウチョウランです。これは先ほどの府の出した冊子は「存在していない」と書いてありましたけれども、ちゃんと自生しております。

これは、先ほどの近畿レッドデータブックに載っていますアケボノシュスランです。これも稀少植物になっています。それから、こちらは木上に生息するというカヤランです。これらは四季折々に観察会を行っているときに撮った写真です。

そして、先ほど言いましたオオタカの生息地図です。これは、日本野鳥の会の大阪支部から借りてきた貴重な資料です。Ａというところの部分が天野山で、最初に番いの繁殖の場所が発見された場所です。それから赤で囲っているのが、97年に槇尾山で確認された印です。この猛禽類の営巣情報を流しますと、密猟の危険がありますので、トップシークレットになっているそうです。それで、このようにほかの地域に関しては黒く塗りつぶしております。ですから、もっと詳しいことをお聞きになりたい方は、日本野鳥の会の大阪支部の方へ行っていただきたいと思います。この資料はここで忘れていただきたいというぐらいに貴重な資料だそうです。

それから、最後になりますけれども、ここがダム予定地の谷です。そして、この下がせせらぎの清流なんですが、その清流は、ふだんのときは水はこのぐらいしかなくて、お子さんがまたいでいます。このぐらいしか、ちょろちょろしか流れていない。そして、先ほど言いました貴重種のカジカガエルです。

最後に、私たちの会に寄せられた地元の横山に住む高校生からの手紙を抜粋して読ませていただきます。「洪水になっているのは山の方ではなくて、下流の地域なのではないですか。もともと山からたくさんの水が流れているのではなくて、川の下流になると、そこに水が集まるから川が氾濫するのだと思います。だから、山にダムなんかをつくっても、せいぜい山に降った水しか集まりません。それだけでは下流の地域の洪水は防げないと思います。それに山にはもともとの自然のダムがあるじゃありませんか。そうです。木がいっぱいあって、それが水が一斉に流れてしまうのを防いでいます。学校でも習いました。そんな自然のダムを壊してまで人工のダムが本当に必要なんでしょうか」という疑問を持った手紙をいただいています。

これで私の意見を終わらせていただきます。評価委員の皆様、本当によく考えて、よろしくお願いいたします。